

〔資料〕

昭和女子大学図書館蔵

『建禮門院集』

—— 解題・校異・影印・翻刻 ——

齋藤 彰

【解題】

昭和女子大学図書館蔵『建禮門院集』(和九一一・一三八・五)。『建禮門院右京大夫集』である。包み紙入り。外題は、表紙左上題簽(縦一〇・〇糎、横二・六糎)に「建禮門院集」と書く。内題なし。袋綴一冊。表紙は、香色無地鳥の子紙。縦一五・八糎、横二二・一糎。表紙に摺れ、料紙に水濡れがある。料紙は楮紙。見返しは共紙の原装で、見返しを一丁裏として書写する。遊紙首尾なく、墨付四一丁、全四一丁。本文は一面十三行、和歌二字上り二行書。総歌数一九〇首。同筆の集付(新勅撰)が、第一一二番歌「吹風も」にある。同筆の傍書、補記・見せ消ちがある。光広風の書。江戸初期写。一丁裏に「幡」(二・七糎)の重画円形陽刻朱印、末尾に「岡田眞ノ之藏書」(縦三・一糎、横一・五糎)の重画長方形陽刻朱印がある。岡田眞は、昭和五九年一月没、八三歳。昭和二五年『岡田文庫書目』刊。昭和三〇年、四〇年、五四年の三回、藏書を売り立てた。末尾の「持主伏見町七まかり 坪井武云々」の後の別筆は翻刻しない。第二九番歌から第三二番歌までの四首脱落。第一九五番歌第四句の「こゝろ」まで書写。第一九五番歌第五句「まとひぬるかな」以下第三五七番歌の巻末歌まで書写未了。井狩正司『建禮門院右京大夫集校本及び総索引』(笠間書院 昭和四四年九月)参照。A系統本第二類・第四類の性格が認められる。

【校異】

凡例

一、昭和女子大学図書館蔵『建禮門院集』(和九一一・一三八・五)と九州大学図書館蔵本(五四四・ケ・一五、A系統本第一類)との校異である。
 一、校異箇所のだ数、表・裏、歌番号・詞書を示した。
 一、漢字と仮名、「む」「ん」、「お」「を」、「い」「ゝ」「ゐ」、「ひ」「ゝ」「ゐ」、「ふ」「う」、「を」「ほ」などの表記の異同は除く。

- 一丁裏1詞書 なにとなく―なにと(二字分空白)
- 一丁裏1詞書 そのおりく―あるをりく
- 一丁裏1 のこる共―つたはらは
- 二丁表3詞書 しはし―しり
- 二丁裏3詞書 等位―の二位
- 二丁裏3詞書 しかは―し
- 二丁裏3詞書 おはします―おいます
- 三丁表4詞書 さねむね―さねむねのつねに
- 三丁表4詞書 中宮―中宮の
- 三丁表4詞書 へに―へ
- 三丁裏6詞書 よひとゝめて―よひとめて
- 四丁表6詞書 ふたあひ―ふたへ
- 四丁表6詞書 中将の―中将
- 四丁裏6 あふひの―あふひを

四丁裏7 詞書 うちにーうちも
 五丁裏9 詞書 申ころー申し
 五丁裏9 詞書 なりしをーなりし
 五丁裏9 詞書 女房ー女はら
 六丁表10 作者 たかふさの中将ー隆房少将
 六丁表12 詞書 月のー月
 六丁裏12 詞書 わらはせーわたらせ
 七丁表14 はつはるーはつはな
 七丁裏18 いはとーいわせ
 七丁裏19 ともにーともと
 七丁裏20 いはーいそ
 七丁裏21 くもるよーくもりよ
 八丁表22 詞書 つくるーすくる
 八丁表24 はかすーかはす
 八丁裏27 詞書 夏草ー草
 八丁裏33 わひしきーさひしき
 九丁裏39 をかはーおかの
 一〇丁表45 こすゑよりー声すなり
 一〇丁裏50 詞書 へたてたるーへたつる
 一一丁表52 ますーする
 一二丁表58 詞書 内里にー内裏
 一二丁表58 詞書 いつれとしーいつれのとし
 一二丁表58 詞書 えうよーえう
 一二丁裏59 詞書 中将ー中納言
 一二丁裏59 詞書 きこえー申し
 一二丁裏59 詞書 五節にーナシ
 一二丁裏59 詞書 を舟をーをふね
 一二丁表60 詞書 うすやうー白きうすやう
 一二丁表60 詞書 かくーかきて
 一二丁表61 詞書 人もー人
 一二丁表61 詞書 とりわきーとりわきて
 一二丁表61 詞書 あるまじのことーあるふしきのこと
 一二丁表61 詞書 ともーと

一三丁表61 詞書 のかれかたくてやーのかれかたくて
 一四丁表63 詞書 いたしてーいたしつ
 一四丁表63 あるーおく
 一四丁表63 末ー袖
 一四丁表64 なけーなけく
 一四丁表65 秋月ー秋の月
 一四丁表65 月の影ー月の色
 一四丁表66 詞書 みつ人のみよとてーみよとて人の
 一四丁裏67 詞書 かけはなれいへはーかけはなれいくは
 一四丁裏67 詞書 くやしうーくやしく
 一四丁裏67 詞書 いつしかのーいつしか
 一四丁裏67 詞書 うらやましくーうらやましう
 一五丁表69 詞書 うせしーうせにし
 一五丁表70 詞書 つ(「か」見せ消ち)けてーナシ
 一五丁表70 華ー花
 一六丁裏77 詞書 うへにーナシ
 一七丁表79 詞書 御繪ーゑ
 一七丁表79 詞書 てー昔ての
 一七丁表80 詞書 したしき人にー親しき人
 一七丁表80 詞書 なきしにー常に鳴きしに
 一七丁裏81 かほるーかをる
 一八丁表83 詞書 にかくーにて
 一八丁表84 詞書 さうふーしやうふ
 一八丁表85 詞書 女宮ー女君
 一八丁表85 詞書 権のすけ(傍書「これもり」)ーこんのすけこれもり
 一八丁表85 詞書 あら(傍書「り歟」)しーありし
 一八丁裏87 詞書 つるてにーついでの
 一八丁裏88 詞書 つくる日ー尽くる
 一八丁裏88 詞書 還御なるー還向ある
 一八丁裏88 詞書 した繪したるーしたゑの
 一九丁表89 詞書 中将ー中将の
 一九丁表89 詞書 おしかほー惜しけ
 一九丁表89 詞書 物あはれけーものあはれ

一九丁表 89 たちかへり―たちかへる
 一九丁裏 90 もみちはも―もみちをも
 一九丁裏 92 詞書 朝臣―朝臣の
 一九丁裏 92 もみちはを―もみちをは
 二〇丁表 94 詞書 さと―御さと
 二〇丁表 94 詞書 まいられたりしに―まいられたりし
 二〇丁表 95 詞書 春の―はる
 二〇丁裏 95 詞書 あたらよ―を
 二〇丁裏 95 詞書 少将―少将の
 二〇丁裏 95 詞書 つかひにて―ナシ
 二〇丁裏 95 詞書 見わたされ―ナシ
 二二丁表 95 詞書 返こと―返し
 二二丁表 95 詞書 たかふさの―たかふさ
 二二丁裏 97 詞書 よまぬ―えよまぬ
 二二丁表 99 詞書 いつかは申たる―いつかはさは申たる
 二二丁表 100 しられ―しらせ
 二二丁表 101 詞書 返事―返し
 二二丁裏 102 ふかさを―ふかきを
 二二丁裏 103 詞書 北方―その北のかた
 二二丁裏 103 詞書 きこゆる―きこゆ
 二二丁表 107 詞書 大納言―大納言の
 二二丁表 109 作者 京こく殿―ナシ
 二二丁裏 111 詞書 かきけて―かきつけて
 二二丁表 112 詞書 かきて―かきつけて
 二二丁表 112 詞書 つく―おく
 二二丁表 113 詞書 六原殿―六波羅殿
 二二丁裏 114 詞書 兼光―兼光の
 二二丁表 115 詞書 おもかけ―人のおもかけ
 二二丁表 115 詞書 おほして―おほえて
 二二丁裏 116 詞書 たに―ナシ
 二二丁裏 116 詞書 思ひつゝける事―おもひつゝけらるゝこと
 二六丁裏 122 詞書 とかく―よく
 二六丁裏 122 詞書 月のあかきよ―月のあかき

二六丁裏 122 詞書 いたしたる―ゐたる
 二六丁裏 123 詞書 思に―おもふ
 二六丁裏 123 詞書 枕―まくらの
 二七丁表 123 すゝ(傍書)「か敷」れて―すゝかれて
 二七丁表 124 くらされて―くらさせて
 二七丁表 125 人々―人
 二七丁裏 125 詞書 いみしく―人いみしう
 二七丁裏 125 ふえ竹も―たふゑたけの
 二七丁裏 126 たゝ―ナシ
 二七丁裏 126 詞書 よそ―よそに
 二七丁裏 127 詞書 ふえのをと―ふゑおと
 二七丁裏 127 詞書 としゝゝ―こと
 二八丁表 127 なきぬる―なくなる
 二八丁表 127 とまり―とまる
 二八丁裏 129 ままことの―まことの
 二八丁裏 130 うつり―やとり
 二八丁裏 130 雲に―雲よ
 二九丁表 132 君に―きみは
 二九丁表 132 さりとも―さすかに
 二九丁表 133 いみしく―いみしう
 二九丁表 133 詞書 せられし―せられしは
 二九丁表 133 いかに―いかゝ
 二九丁裏 136 詞書 しのふのさと―しのふのやま
 二九丁裏 136 詞書 もの物かたり―物かたり
 二九丁裏 136 詞書 ある―人のある
 二九丁裏 137 詞書 も見し―えみえし
 二九丁裏 137 返事―返し
 三〇丁表 137 袖の色―袖のゆへ
 三〇丁表 140 詞書 すゝろくさ―そゝろくさ
 三〇丁表 140 詞書 よく―よう
 三〇丁裏 140 にか―にて
 三一丁表 146 詞書 何事にも―何事も
 三一丁表 146 詞書 事―ことを

三二丁表 146 けりーける
 三二丁裏 148 あまるーとまる
 三二丁裏 149 詞書 同しーをなし比
 三二丁裏 149 詞書 を返事のーナシ
 三二丁表 150 詞書 いてつるーいつる
 三二丁表 151 詞書 返事ー返し
 三二丁表 151 詞書 しーしに
 三二丁表 151 詞書 身にもあらぬにー我身ならぬに
 三二丁裏 153 詞書 ひさしくてーひさしく
 三二丁裏 153 詞書 よにはー世に
 三二丁裏 153 詞書 きくーきゝて
 三二丁裏 153 詞書 ありけるとーありけりと
 三二丁表 155 見えくらんーみえつらむ
 三二丁表 156 たのめしーちきりし
 三三丁表 157 詞書 いかてーいかてか
 三三丁裏 157 身のー身に
 三三丁裏 159 詞書 まいりたるーまいる
 三四丁表 160 詞書 なにはーなにはの
 三四丁表 161 詞書 時は木ー常葉木
 三四丁裏 162 こすゑ迄ー木すゑさへ
 三四丁裏 163 詞書 人をー人をも
 三四丁裏 163 詞書 こゝろみんとー心みんとて
 三五丁表 164 詞書 いひたるーいひたりし
 三五丁裏 165 詞書 心にかけてー心かけて
 三六丁表 167 詞書 ためしなさーためしなさは
 三六丁表 167 詞書 おられましかはーおられなましかは
 三六丁表 167 詞書 たましーためし
 三六丁表 167 詞書 なかられ(傍書「へ歟」)てーなかめられて
 三六丁裏 168 詞書 又なかめつるーなかめつるかな
 三六丁裏 170 をとつれすーおともせず
 三六丁裏 170 うらみにてーうら見へて
 三七丁表 172 詞書 しめくみたるーしためくみたる
 三七丁表 172 詞書 いてゝーいてられて

三七丁表 172 詞書 わたしーわたり
 三七丁裏 175 詞書 うちとのー輔との
 三七丁裏 175 詞書 さましてーさまにて
 三九丁表 185 下葉ーしたえ
 三九丁表 185 ましるーさける
 三九丁表 186 春ーはな
 三九丁表 186 ありときくーあたるを
 三九丁表 187 詞書 たちーたちて
 三九丁表 187 詞書 いかゝはーナシ
 三九丁裏 187 詞書 しらせてほしくてーしらまほしくて
 三九丁裏 188 たちかへりーたちかへる
 三九丁裏 188 いはねともーいはすとも
 三九丁裏 190 詞書 返事ー返し
 四〇丁表 191 なこりやーなこりよ
 四〇丁表 193 詞書 とちーすち
 四〇丁表 193 詞書 心の中ー心のうち
 四〇丁裏 193 まよひーまとる
 四〇丁裏 194 いひいてねともーいひはてねとも
 四一丁表 195 詞書 思ひしーおもふ

【影印】・【翻刻】

凡例

- 一、本翻刻の底本は、昭和女子大学図書館蔵『建禮門院集』（和九一一・一三八・五）である。
- 一、上段の写真と対照して、下段に原本の行取り、改丁通り翻刻する。
- 一、原本の行取り、改丁に準じ、丁数及びオ・ウの省略符号を（「1ウ」のごとく示す。
- 一、句読点を加えた。
- 一、新編国歌大観番号を付けた。

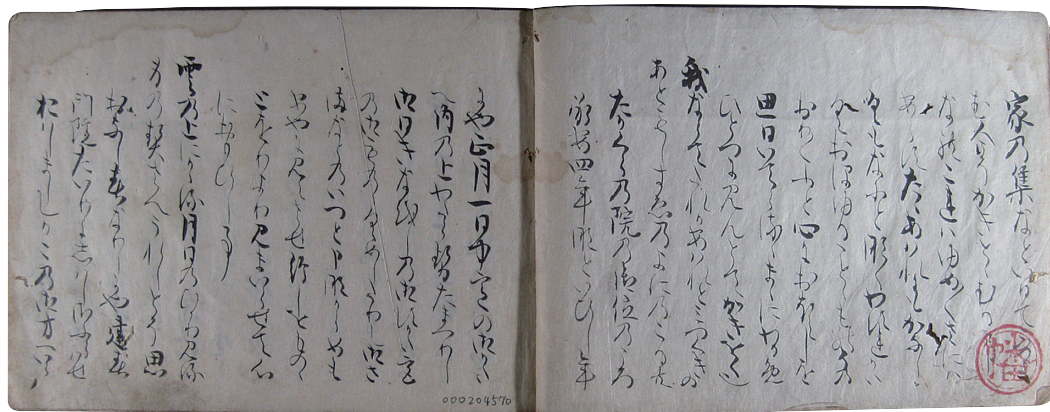
【影 印】



【翻 刻】

建禮門院集

「表表紙



家の集なといひて、哥よ
む人こそかきとむる事
「幡」(朱印)

なれ、これは、ゆめくさには

あらず。たゞ、あはれにもかなし

くも、なにとなくわすれかた

くおほゆることゝものその

おりくふと心におほえしを、

思ひいでらるゝまゝに、わかめ

ひとつに見んとて、かきをく也。

1我ならてたれかあはれとみつくきの

あともしすゑのよにのこる共

たかくらの院の御位のところ、

承安四年なといひし年

にや、正月一日、中宮の御かた

へ内の上わたらせたまへりし、

御ひきなをしの御すかた、宮

の御ものゝくめしたりし御さ

まなどの、いつと申なから、めも

あやに見えさせ給しを、ものゝ

とをりより見まいらせて、心

におもひし事、

2雲の上にかゝる月日のひかり見る

身の契さへうれしと思

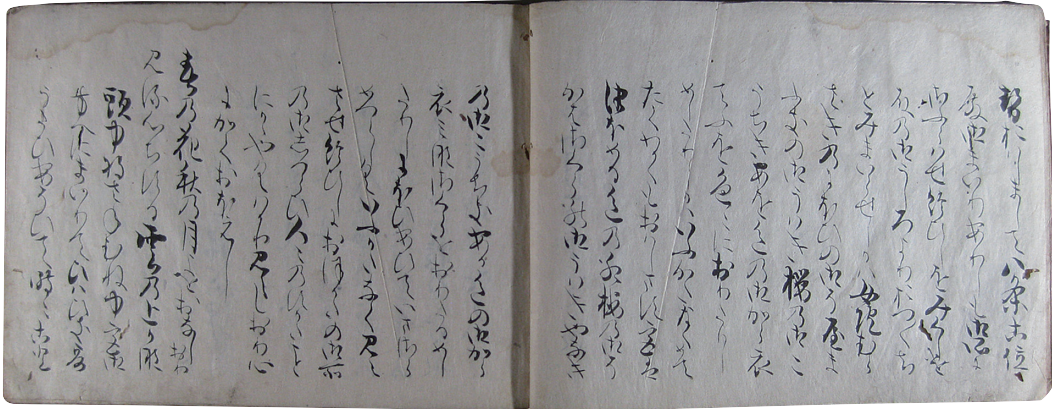
おなし春なりしにや、建春

門院たいりにしはしきふらはせ

おはしまししか、この御方へいら

「1ウ

「2オ



せおはしまして、八条等位

殿御まいりありしも、御所に

さふらはせ給ひしを、みくしけ

殿の御うしろより、おつゝち

とみまいらせしかは、女院むら

さきのにほひの御そ、やま

ふきの御うはき、桜の御こ

うちき、あを色の御から衣、

てふを色々におりたりし

めしたりしかは、いふかたなくめて

たく、わかくもおはします。宮は、

つほめる色の紅梅の御そ、

かはさくらの御うはき、やなき

「 2ウ

の御こうちき、あか色の御から

衣、みなさくらをおりたるめし

たりし、にほひあひて、いまさら

めつらしく、いふかたなく見え

させ給ひしに、おほかたの御所

の御しつらひ、人々のすかたこと

にか、やくはかり見えしおり、心

にかくおほえし。

3 春の花秋の月よをおなしおり

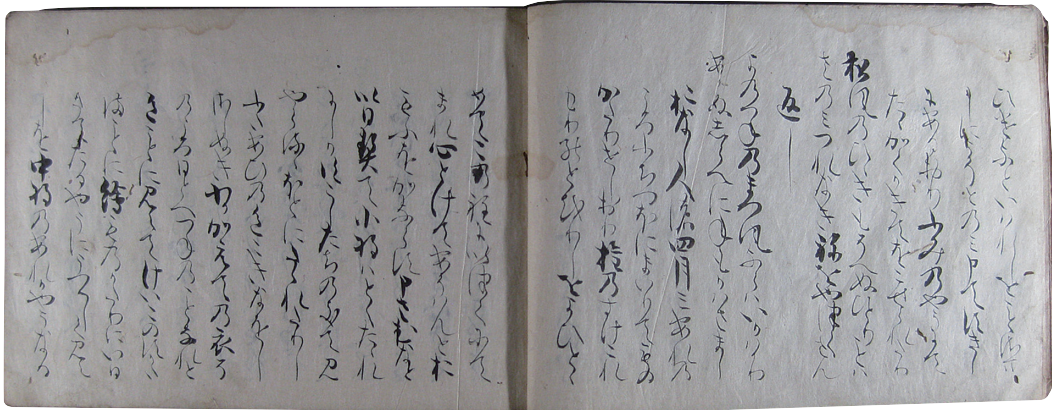
見る心ちする雲の上かな

頭中将さねむね、中宮御

方へにまいりて、ひはひき、哥

うたひあそひて、時々こと

「 3オ



ひけなといはれしを、ことさま

しにこそとのみ申てすまし

に、あるおり、ふみのやうにて

た、かくかきてをこせられたり。

4 松風のひきもそへぬひとりことは

さのみつれなきねをやつくさん

返し

5 よのつねのまつ風ならはいかはかり

あかぬしらへにねもかはさまし

おなし人の、四月みあれの

ころ、ふちつほにまいりても

かたりせしおり、権のすけこれ

もりのとをりしをよひと、

「 3ウ

めて、この程にいつくにて

まれ、心とけてあそはんとお

もふをかならず申さむなど

いひ契て、少将はとくた、れ

にしか、すこしたちのきて見

やらるゝほとにたゝれたりし、

ふたあひの色こきをなし

さしぬき、わかかえての衣、そ

のころひとへ、つねのことなれと、

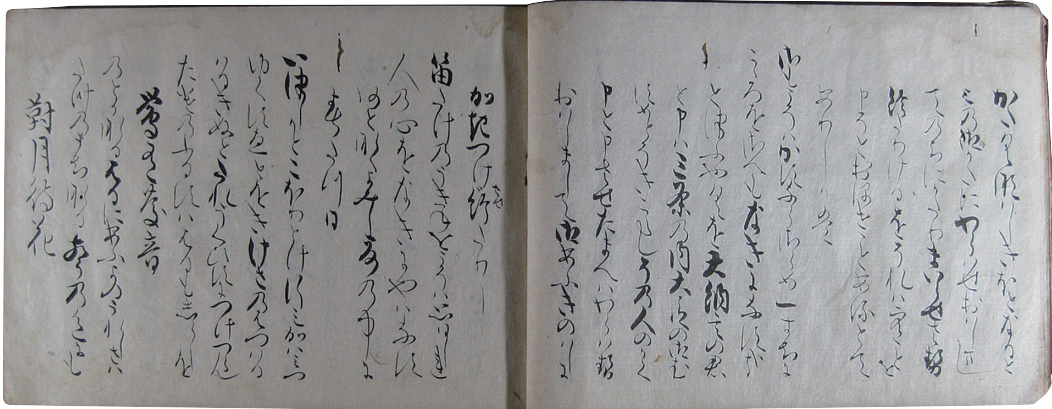
色ことに見えて、けいこのすかた、

まことに繪ものかたりにいひ

たてたるやうにうつくしく見え

しを、中将のあれかやうなる

「 4オ



かたくなはしきほとなると、

この御かたにわらはせおはしまし

てのちに、かたりまいらせさせ

給たりけるを、それは空ことを

申そとおほせことあるとて

ありしかは

12 さもこそはかすならさらめ一すちに

ころをさへもなきになす哉

とつふやくを、大納言の君

と申は三条の内大臣の御む

すめとそきこえし、その人のかく

申と申させたまへはわらはせ

おはしまして、御あふきのはしに

かきつけ^{させ}給たりし

13 笛たけのうきねをこそは思ひしれ

人の心をなきにやはなす

何となくよみし哥の中に、

春たつ日

14 いつしかとこほりとけ行みかはみつ

ゆくすゑとをきけさのはつはる

15 はるきぬとたれうくひすにつけつらん

たけのふるすははるもしらしを

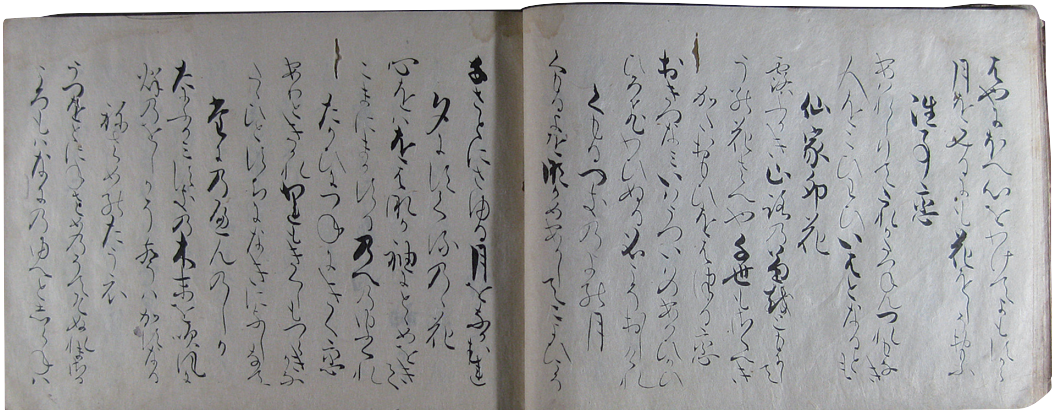
鶯有慶音

16 のとかなるはるにあふよのうれしさは

たけのうちなる聲の色にも

對月待花

「 7 オ



17 はやにほへ心をわけてよもすから

月をみるにも花をしそおもふ

往事戀

18 あはれしりてたれかたつねんつれもなき

人をこひわひいととなるとも

仙家卯花

19 露ふかき山路の菊をともしして

うの花さへや千世もさくへき

かたおもひをはつる戀

20 おきつなみいはうついのはあはひかひ

ひろひわひぬる名こそおしけれ

くもるつきのよの月

21 くもるよをななめあかしてこよひこそ

千さとにさゆる月をなかわれ

夕につくるのゝ花

22 心をはをはなか袖にとゝめをきて

こまにまかすのへのゆふくれ

たかひにつねにきく戀

23 ありときかれわれもきくしもつらきかな

たゝひとすちになきになしなて

たにのへんのしか

24 たにふかみすきの木末を吹風に

秋のをしかそ聲はかすなる

ねさめのたう衣

25 うつつをとにねさめのそてそぬれまさる

ころもはなにのゆへとしらねは

「 8 オ

名をかへてあふ戀
 いとはれしうきなをさらにあらためて
 あひみるしもそつらさそひける
 野亭夕の夏草
 27 ゆふされは夏のくさのかたなひき
 すゝみかてらにやすむたひ人
 連夜のくゐな
 28 あれはてゝさすこともなきまきのとを
 なにとよかれすたゝくくるなそ
 夜ふかき春雨
 33 ふくるよのねさめわひしき袖の上を
 とにもぬらすはるの雨かな
 とをきさはの春こま
 34 はるかなるのさにはあるはなれこま
 かへさや道のほともしるらん
 くらき空の帰かり
 35 花をこそおもひもすてめありあけの
 月をもまたてかへるかりかね
 暁のよふことり
 36 よをのこすね覚にたれをよふこ鳥
 人もこたへぬしのゝめの空
 山田のなほしろ
 37 山さとはかとのをたのなほしろに
 やかてかけひの水まかせつゝ
 ふるき池のかきつはた
 38 あせにけるすかたの池のかきつはた

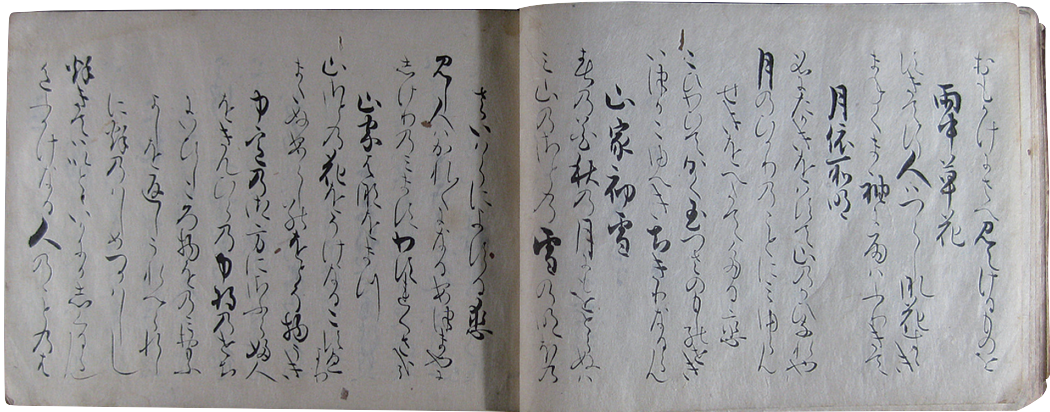
「 9 オ

「 8 ウ

いくむかしをかへたてきぬらん
 名所のすみれ
 39 おほつかなならひのをかは名のみして
 ひとりすみれの花そ露けき
 所々のやまふき
 40 わかやとのやへ山ふきのゆふはへに
 いてのわたりも見る心ちして
 海のみちの春のくれ
 41 いかりおろす波間にしつむ入日こそ
 くれゆくはるのすかたなりけれ
 瀧のへんののこりの雪
 42 こほりこそ春をしりけれたきつせの
 あたりの雪はなをそのこれる
 さわらひ
 43 むらさきのちりはかりしてをのつから
 ところくにもゆるさわらひ
 ふねのとまりの花
 44 たかさこのおのへの春をなかむれば
 花こそふねのとまりなりけれ
 45 ともふねもこきはなれ行こすゑより
 かすみふきとけよこのうら風
 花落衣
 46 さそひつる風はこすゑを過ぬ也
 はなはたもとにちりかゝりつゝ
 老人を戀
 47 つくもかみこひぬ人にもいにしへは

「 10 オ

「 9 ウ



おもかけにさへ見えけるものを

雨中草花

48 すきて行人はつらしな花すゝき

まねくま袖に雨はふりきて

月依所明

49 名にたかきをはすて山のかひなれや

月のひかりのことにみゆらん

せきをへたてたる戀

50 こひわひてかく玉つさのもしのせき

いつかこゆへきちきりなるらん

山家初雪

51 春の花秋の月にもをとらぬは

み山のさとの雪の明ほの

さいはらによする戀

52 見し人はかれくくなるあつまやに

しけりのみますわすれくさ哉

山家はなをまつ

53 山さとの花をそけなるこすゑより

またぬあらしのをとそ物うき

中宮の御方にさふらふ人

を、きんひらの中将のせち

にいひしころ、物をのみおもふ

よしを返くうれへられし

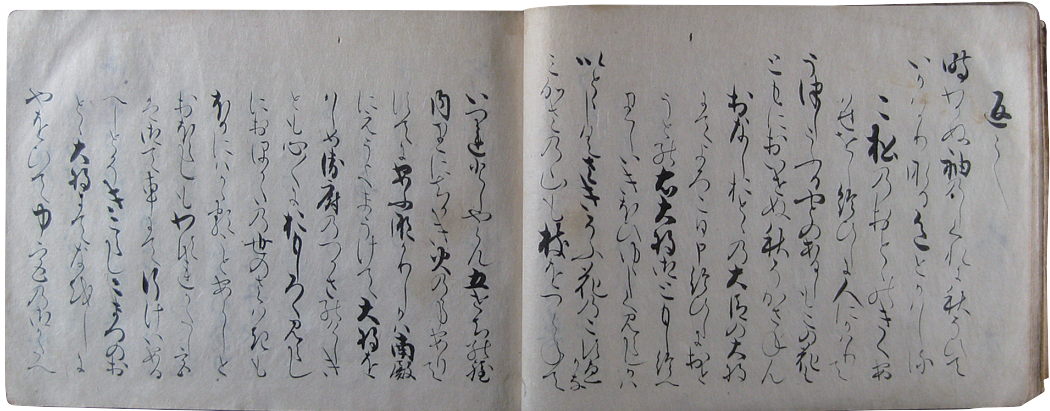
に、秋のはしめつかはしし

54 秋きてはいとゝいかにかしくるらん

色ふかけなる人のことのは

「 11 オ

「 10 ウ



返し

55 時わかぬ袖のしくれに秋そひて

いかはかりなる色とかはしる

こ松のおとゝのきくあ

はせをし給ひしに、人にかはりて

56 うつしうふるやとのあるしもこの花も

ともにおいせぬ秋そかさねん

おなしおとゝの、大臣の大将

にてよるこひ申給ひしに、おと

うとの右大将、御ともし給へ

りしいきほひゆゝしく見えしかは

57 いとゝしくさきそふ花のこすゑかな

みかさの山も枝をつらねて

いつれとしやらん五せちの程、

内里にちかき火の事ありて、

すてにあふなかりしかは、南殿

にえうよまうけて、大将を

はしめ衛府のつかさのけしき

とも心くにおもしろく見えし

におほかたの世のさはきも

ほかにはかゝることあらしと

おほえしもわすれかたし、宮

は御て車にて行けいある

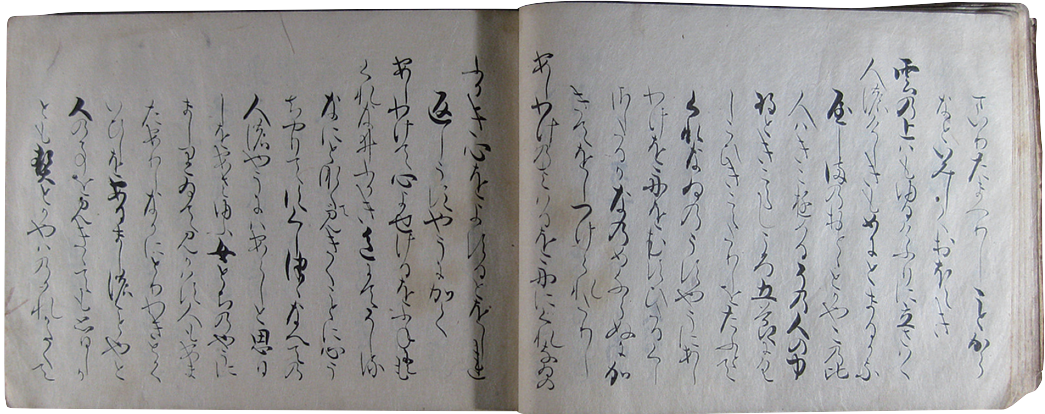
へしとそきこえし、こまつのお

とゝ大将にて、なをしに

やをひて中宮の御かたへ

「 12 オ

「 11 ウ



まいりたまへりしことから
など、いみしくおほえき。

58 雲の上はもゆるけふりに立さはく
人のけしきもめにとまるかな

やしまのおとととかや、この比
人はきこゆる、その人の中
将ときこえしころ、五節にく

しこひきこえたりしをたふとて
くれなるのうすやうにあし
わけを舟をむすひたるくし

59 あしわけのさはるを舟にくれなるの
ふかき心をよするとをしれ
返し うすやうにかく

60 あしわけて心よせけるをふねとも
くれなるふかき色にてそしる
なにとなく、見きくことに心う

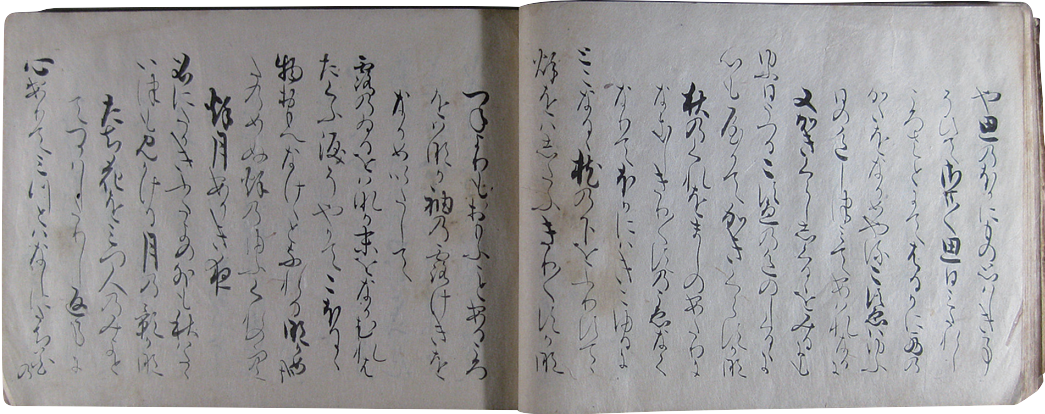
ちやりてすくしつ、なへての
人のやうにはあらしと思ひ
しを、あさゆふ、女とちのやうに

ましりて見かはす人もあま
たありしなかに、とりわきとかく
いひしを、あるましのことやと、

人の事を見きくとも思ひしか
とも、契とかやはのかれかたくて

「 13 オ

「 12 ウ



や、思のほかにもの思はしき事
そひて、さまく思ひみたれし
ころ、さとにて、はるかに西の

61 ゆふ日うつるこす糸の色をしくるに
心もやかてかきくらすかな
秋のくれ、をましのあたりに

62 とこなる、枕の下をふりすて、
秋をはしたふきりくすかな
つねよりもおもふことあるころ、

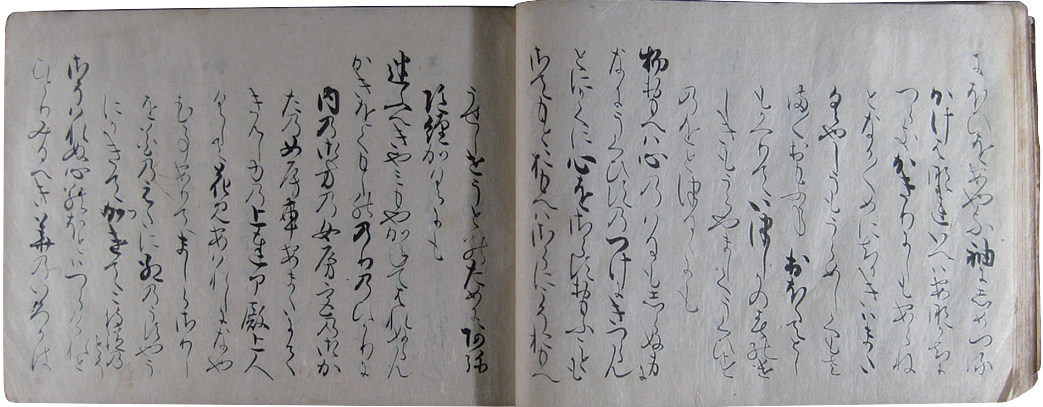
63 露のゐるをはなか末をなかわれは
たくふ涙そやかてこほる、
64 物おもへなけとなれるなかも哉

65 名にたかきふたよの外も秋はた、
いつもみかける月の影かな
たち花をみつ、人のみよと

66 心ありてみつとはなしにたち花の
てつかはしたりし返事に、

「 14 オ

「 13 ウ



にほひをあやな袖にしめつる

かけはなれいへは、あなかちに

つらきかきりにしもあらね

と、なか／＼めにちかきは、また

くやしうもうらめしくも、さ

ま／＼おもふ事おほくて、とし

もかへりて、いつしかの春のけ

しきもうらやましく、うくひす

のをとつるゝにも、

67 物おもへは心のはるもしらぬ身に

なにくひすのつけにきつらん

68 とにかくに心をさらすおもふことも

さてもとおもへはさらにこそおもへ

うせしせうとのために、阿弥

陀經かくにも、

69 迷ふへきやみもやかねてはれぬらん

かきをくものりのひかりに

内の御方の女房、宮の御か

たの女房、車あまたにて、

きんしゆの上達部、殿上人

くして、花見あはれしに、なや

む事ありてましらさりし

を、花のえたに、紅のうすやう

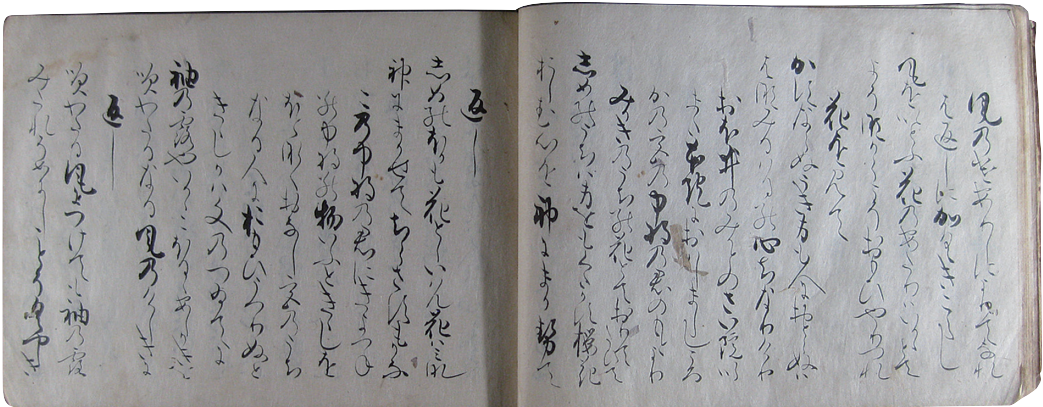
にかきて、かけてこ侍従のとそ、

70 さそはれぬ心のほとはつらけれど

ひとりみるへき華のいろかは

「 15 オ

「 14 ウ



風のけありしによりてなれ

は、返しに、かくきこえし。

71 風をいとふ花のあたりはいかゝとて

よそなからこそおもひやりつれ

花を見て、

72 かすならぬうき身も人におとらぬは

はなみるはるの心ちなりけり

おほるのみかとのさい院、い

また本院におはしまししころ、

かの宮の中将の君のもとより、

みかきのうちの花とて、おりてたひて、

73 しめのうちは身をもくたかす桜花

おしむ心を神にまかせて

返し

74 しめのほかも花としいはん花はみな

神にまかせてちらさすもかな

この中将の君に、きよつね

の中将の物いふときゝしを、

ほとなく、おなし宮のうち

なる人におもひうつりぬと

きゝしかは、文のつるてに、

75 袖の露やいかゝこほるゝあしかきを

吹わたるなる風のけしきに

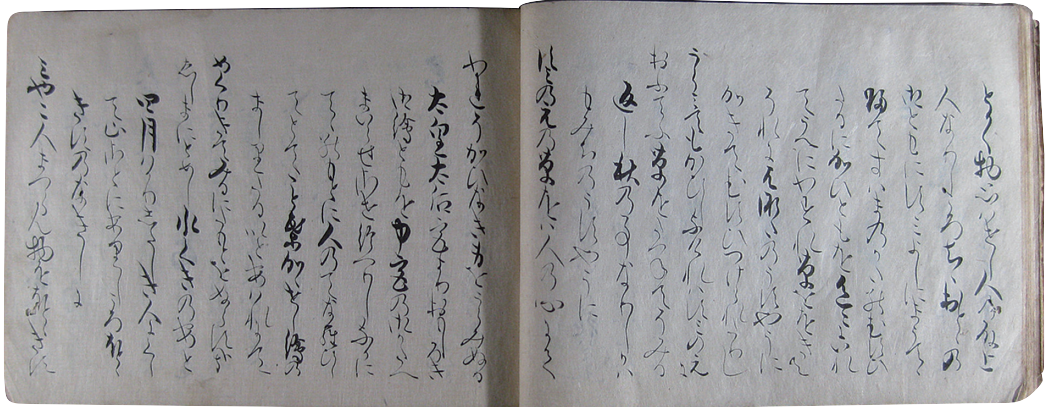
返し

76 吹わたる風につけても袖の露

みたれそめにしことそくやしき

「 16 オ

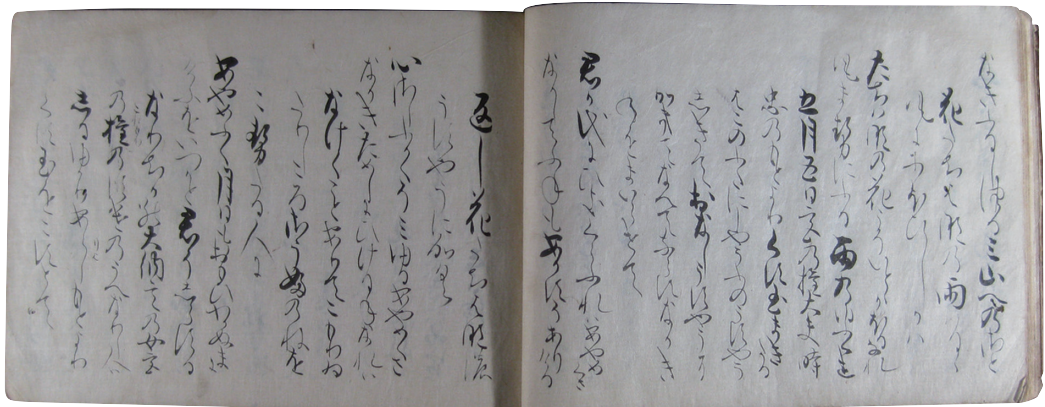
「 15 ウ



- とかく物思はせし人の、殿上人なりしころ、ちゝおとゝの御ともにすみよしにまうてゝ、帰て、すはまのかたのむすひたるに、かひとを色々にいれて、うへにわすれ草をきて、それにはなたのうすやうにかきて、むすひつけられたりし77うらみてもかひしなればすみのえにおふてふ草をたつねてそみる返し 秋の事なりしかは、もみちのうすやうに、
- 78すみのえの草をは人の心にてわれそかひなき身をうらみぬる太皇太后宮より、おもしろき御繪ともを、中宮の御かたへまいらせさせ給へりしなかに、てゝのもとに人のてならひしとて、こと葉かゝせし繪のましりたる、いとあはれにて、79めくりきてみるにたもとをぬらす哉 彗しまにとめし水くきのあと 四月はかり、したしき人にくして、山さとにありしころ、ほとゝきすのなきしに、
- 80みやこ人まつらん物をほとゝきす

「 17オ

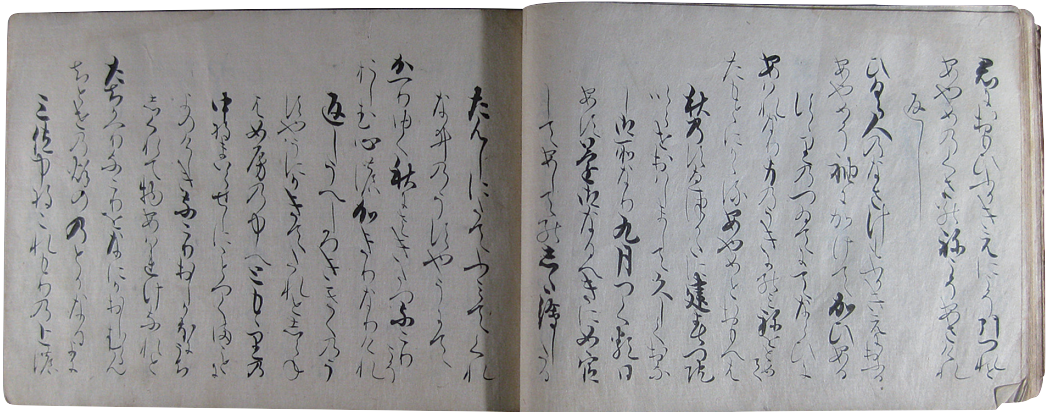
「 16ウ



- なきふるしつるみ山へのさと花たちはなの、雨はるゝ風にはほひしかは、81たちはなの花こそいとゝかほるなれ 風ませにふる雨のゆふくれ 五月五日、宮の権大夫時 忠のもとより、くす玉まきたるはこのふたに、しやうふのうすやうしきて、おなしうすやうにかきて、なへてならすなかき ねをまいらせて、82君か代にひきくらふればあやめくさ なかしてふねもあかすそありける 返し 花たちはなのうすやうにかく 83心さしふかくそみゆるあやめくさ なかきためにひけるねなれば なけくことありてこもりる たりしころ、さうふのねをこせたる人に、 84あやめく月日もおもひわかぬまに けふをいつかと君そしらする なりちかの大納言の女宮 これものの権のすけのうへなりし人は、 り敷しるゆかりあらしもとより、くす玉をこすとて

「 18オ

「 17ウ



85 君におもひふかきえにこそ引つれと
あやめのくさのねこそあさけれ
返し

86 ひく人のなさけもふかきえにおふる
あやめそ袖にかけてかひある
すゝりのつゐてにてならひに

87 あはれなり身のうきにのみねをとめて
たもとにかゝるあやめとおもへは
秋のすゑつかた、建春門院

いらせおはしまして、久しくおな
し御所なり。九月つくる日、
あす還御なるへきに、女官
して、あしてのした繪したる

たんしに、たてふみて、くれ
なるのうすやうにて、

88 かへりゆく秋にさきたつなこりこそ
おしむ心のかきりなりけれ
返し うへしろききくのう

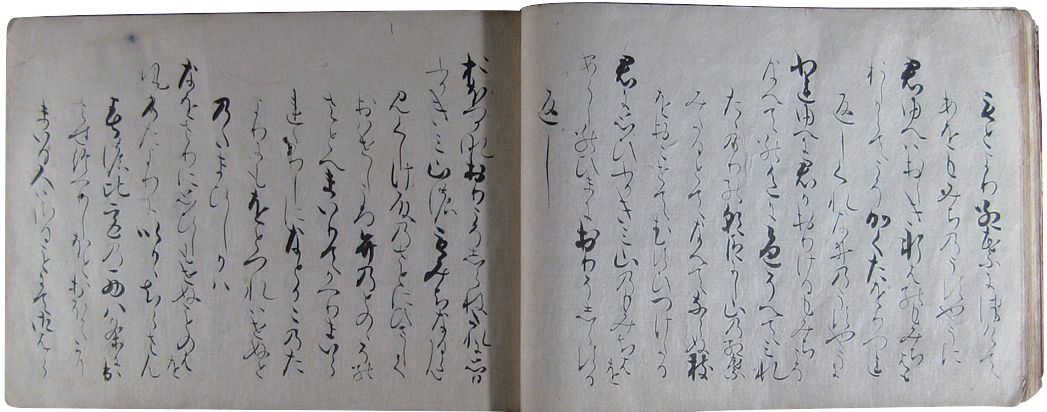
すやうにかきて、たれとしらね
は、女房の中へ、ともりの
中将まいらせしにことつく、まことに、

よのけしきなこりおしかほにうち
しくれて、物あはれけなれと、
89 たちかへりなこりをなにとおしむらん
ちとせの秋ののとかなるよに

三位中将これもりの上の

「 19 オ

「 18 ウ



もとより、紅葉につけて、
あをもみちのうすやうに、

90 君ゆへはおしき軒はのみみちはも
おしからてこそかくたをりつれ
返し くれなるのうすやうに、

91 われゆへに君かおりけるもみちこそ
なへての色に色そへてみれ
たゝのりの朝臣、にし山の紅葉

みたるとて、なへてならぬ枝
をおこせて、むすひつけたる。
92 君に思ひふかきみ山のもみちはを
あらしのひまにおりそしらす
返し

93 おほつかなおりこそしらねたれに思ひ
ふかきみ山のもみちなるらん
みくしけ殿の、さとにひさしく

おはせしころ、弁のとのゝ、その
さとへまいりてかへりまいら
れたりしに、などかこのた

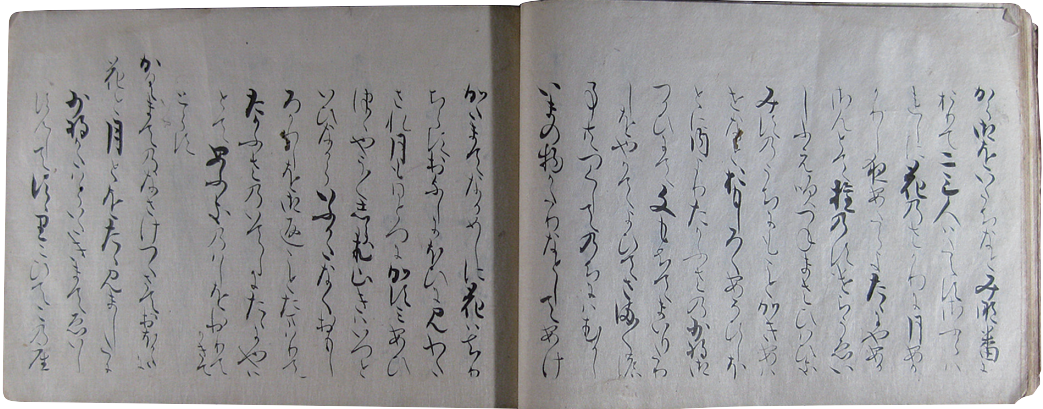
よりにもをとつればせぬと
のたまひしかは、

94 なをさりに思ひしもせぬことのはを
風のたよりにいかゝちらさん
春の比、宮の、西八条に出

させ給へりしほと、おほかたに
まいる人はさることにて、御はら

「 20 オ

「 19 ウ



から、御をいたちなど、みな番に
おりて、二三人はたえすさふらは
れしに、花のさかりに、月あか

かりし夜、あたらよ、たゝにやあか
さんとて、権のすけらう急い

し、ふえ吹、つねまさひはひき、
みすのうちにもことかきあは

せなど、おもしろくあそひしほ
とに、内よりたかふさの少将御

つかひにて、文もちてまいりたり
しを、やかてよひて、さまくの

事共つくして、のちには、むかし
いまの物かたりなとして、あけ

かたまたなめしに、花はちり
ちらすおなしにほひに見わた

され、月もひとつにかすみあひ
つゝ、やうくしらむ山きは、いつと

いひながら、いふかたなくおもし
ろかりしを、御返ことたまはりて

たかふさのいてしに、たゝにやは
とて、あふきのはしをおりて、かきて

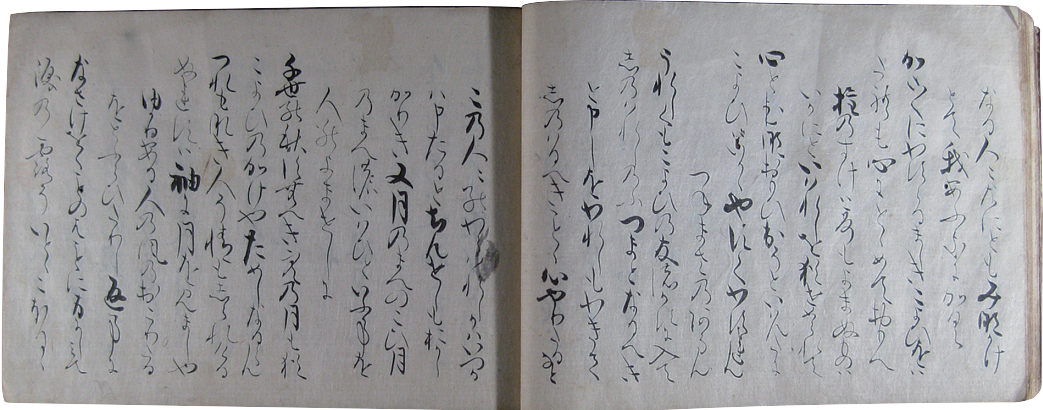
とらす。
95 かくまでなさけつくさておほかたに

花と月とをたゝ見ましたに
少将かたはらいたきまで急いし

すんして、すゝりこひて、この座

「 21オ

「 20ウ



なる人々なにともみなかけ
とて、我あふきにかく。

96 かたゝにわすらるまじきこよひをは
たれも心にとめておもへ

権のすけは、哥もよまぬものは
いかにといはれしを、猶せめられて、

97 心とむなおもひ出そといはんたに
こよひはいかゝやすくわすれん

98 うれしくもこよひの友のかすに入て
しのはれしのふつまとなるへき

と申しを、われしも、わきて
しのはるへきことゝ心やりたるなど、

この人々のわらはれしかは、いつか
は申たるとちんせしも、おかし

かりき。又、月のまへのこひ、月
のまへのいはひといふ事を

人のよませしに、
99 千世の秋すむへき空の月も猶

こよひのかけやためしなるらん
100 つれもなき人を情もしられける

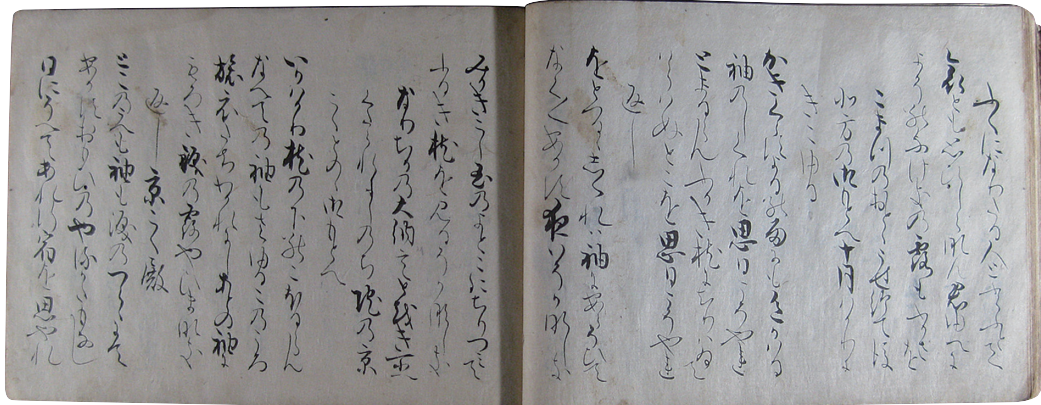
ぬれすは袖に月を見ましや
ゆかりある人の、風のおこりたる

をとふらひたりし返事に、
101 なさけをくことのはに身にしみて

涙の露そいとゝこほるゝ

「 22オ

「 21ウ



102 哀とも思ひしらなん君ゆへに
よそのなげきの露もふかさを

こまつのおと、うせ給て後、
北方の御もとへ十月はかりに
きこゆる。

103 かきくらすよるの雨にも色かはる
袖のしくれを思ひこそやれ

104 とまるらんふるき枕にちりはるて
はらはぬとこそ思ひこそやれ

105 をとつるしくれは袖にあらそひて
なくくあかす夜はそかなしき

106 みかきこし玉のよとこにちりつみて
ふるき枕を見るそかなしき

なりちかの大納言、とをき所へ
くたられにしのち、院の京
こくとの、御もとへ、

107 いかはかり枕の下のこほるらん
なへての袖もさゆるこのころ

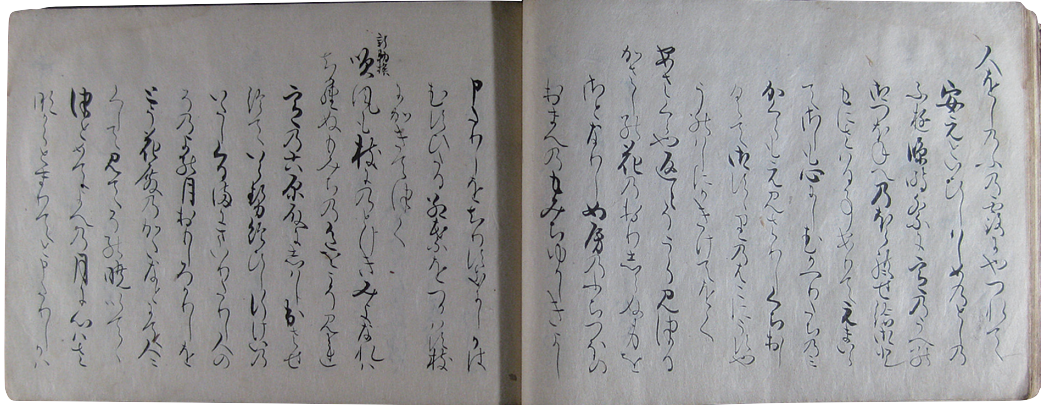
108 旅衣たちわかれにしあとの袖に
もろき涙の露やひまなき

返し 京こく殿
109 とこのうへも袖も涙のつらにて
あかすおもひのやるかたもなし

110 日にそへてあれ行宿を思やれ

「 23 オ

「 22 ウ



人をしのふの露にやつれて

安元といひしはしめのとしの
ふゆ、臨時祭に、宮のうへの
御つほねへのほられせ給御と
もに、さはる事ありてえまいら
て、さしも心にしむかへりたちのみ
かくらもえ見さりし、くちおし
くて、御すりのはこにうすや
うのはしにかきけてをく

111 あさくらや返々そうらみつる
かさしの花のおりしらぬ身を

さとなりし女房の、ふちつほの
おまへのもみちゆかしきよし

申たりしを、ちりすきにしかは、
むすひたる紅葉をつかはす枝

にかきてつく。

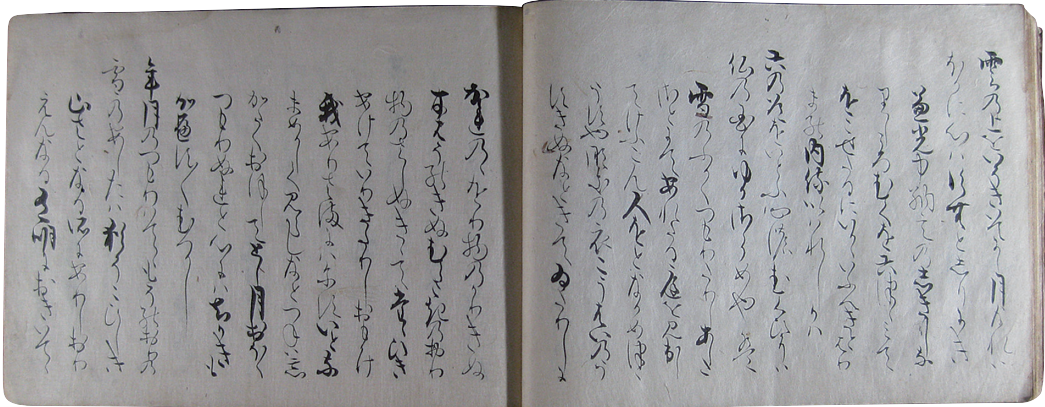
112 ^{新勅撰}吹風も枝にのとけきみよなれば
ちらぬもみちの色をこそ見れ

宮の六原殿にしはし出させ
給て、いらせ給ひし行けいの
いたしくるまにまいりたりし人の
そのよの月おもしろかりしを、
とう花殿のかたなどにて、人々
くして見て、その暁いて、

つとめて、よへの月に心はさ
なからとまりてと申たりしかは

「 24 オ

「 23 ウ



113 雲の上をいそぎいてにし月なれば
ほかに心はすむとしりにき

兼光中納言の、しきしな

りしころ、むくを六つゝみて
をこせたるに、いかゝいふへきとはり

まの内侍いはれしかは、

114 六の道をいとふ心のむくひには

仏の国にゆかさらめやは

雪のふかくつもりたりしあした、
さにて、あれたる庭を見出し

て、けふこん人をとなかめつゝ、
うすやなきの衣、こうはいのう
すきぬなときてあたりしに、

「 24ウ

かれのゝをり物のかりきぬ、
すはうのきぬ、むらさきのおり
物のさしぬきゝて、たゝひき
あけていりきたりしおもかけ、
我ありさまにはにす、いとな
まめかしく見えしなど、つねは忘
かたくおほして、とし月おほく
つもりぬれと、心にはちかきも
かへすゝむつかし。

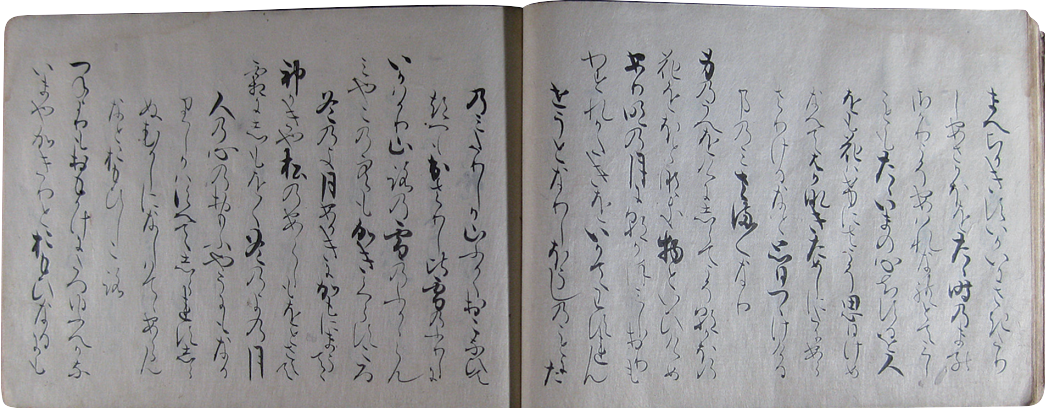
115 年月のつもりはてゝもそのおりの

雪のあしたは猶そこひしき

山さとなる所にありしおり、

えんなる有明におきいてゝ、

「 25オ



まへちかきすいかいにさきたり
しあさかほを、たゝ時のまの

さかりこそあはれなれとてみし

ことも、たゝいまの心ちするを、人
をも、花はけにさこそ思ひけめ、
なへてはかなきためしにたにあら

さりけるなど、思ひつゝける

事のみさまゝなり

116 身のうへをけにしらてこそ朝かほの

花をほとなき物といひけめ

117 あり明の月に朝かほみしおりも

わすれかたきをいかてわすれん

せうとなりしほうしの、ことにた

「 25ウ

のみたりしか、山ふかくおこなひて、

都へも出さりし比、雪のふりしに

118 いかはかり山路の雪のふかゝらん

みやこの空もかきくらすころ

冬よ、月あかきに、かもにまうてゝ、

119 神かきや松のあらしもをとさえて

霜にしもをく冬のよの月

人の心のおもふやうにもなか

りしかは、すへて、しられすしら

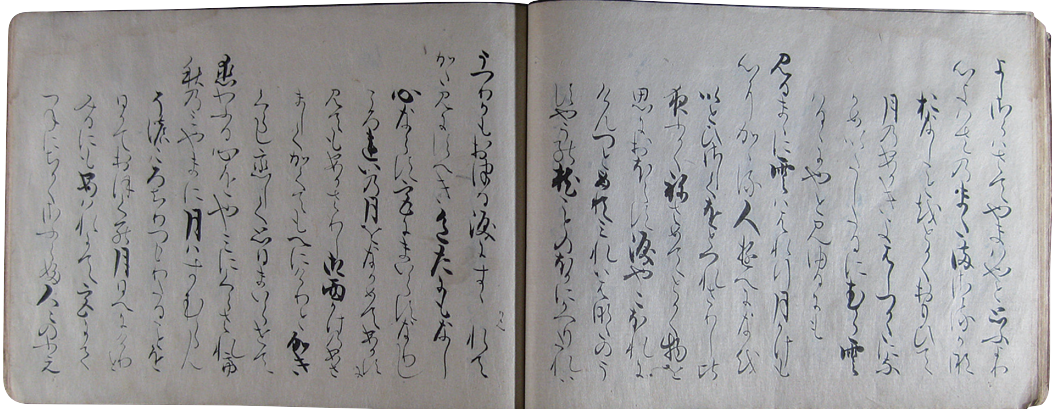
ぬむかしになしはてゝあらん

なとおもひしころ、

120 つねよりもおもかけにたつゆふへかな

いまやかきりとおもひなるにも

「 26オ



121 よしさらはさてやまはやと思ふより
心よはさのたままざるかな

おなしことをとかくおもひて、
月のあかきよ、はしつかたにな
かめいたしたるに、むら雲
はるゝにやと見ゆるにも、

122 見るまゝに雲ははれ行月かけも
心にかゝる人ゆへになを

いとひさしくをとつれさりし比、
夜ふかくねさめて、とかく物を
思に、おほえす涙やこほれに
けん、つとめてみれば、はなたのう
すやうの枕ことのほかにかへりたれば、

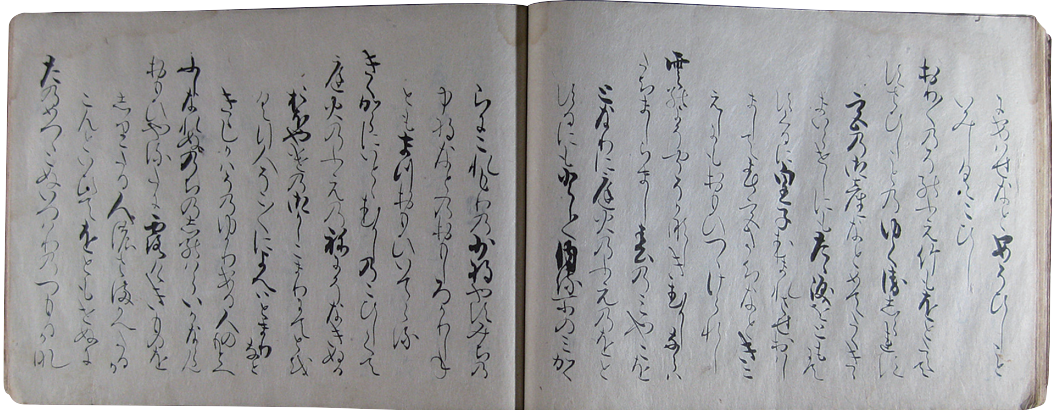
123 うつりかもおつる涙にすゝ^{か敷}れて

かたみにすへき色たにもなし
心ならず宮にまいらすなりし
ころ、れいの月をなかめてあかすに、
見てもあかさりし御面かけの、あき
ましく、かくてもへにけりと、かき
くらし戀しく思ひまいらせて、

124 戀わふる心をやみにくらすれて

秋のみやまに月はすむらん
そのころ、ちりつもりたることを、
ひかておほくの月日へにけりと
みるにもあはれにて、宮にて、
つねにちかくさふらふ人々のふえ

「 27 オ



にあはせなとあそひしこと、
いみしくこひし。

125 おりゝのそのふえ竹もをとたえて
すさひしことのゆくゑしられす
宮の御産など、めてたくきゝ
まいらせしにも、たゝ涙をともにて
するに、皇子むまれさせおはし
まして、春宮たちなときこ
えしにも、おもひつゝけられし。

126 雲のよそ聞そかなしきむかしならば
たちましまし春のみやこそ

となりに、庭火のふえのをと
するにも、としゝ内侍所のみかく
らに、これもりの少将、やすみちの
中将などのおもしろかりしね
ともまつおもひいでたる。

「 27 ウ

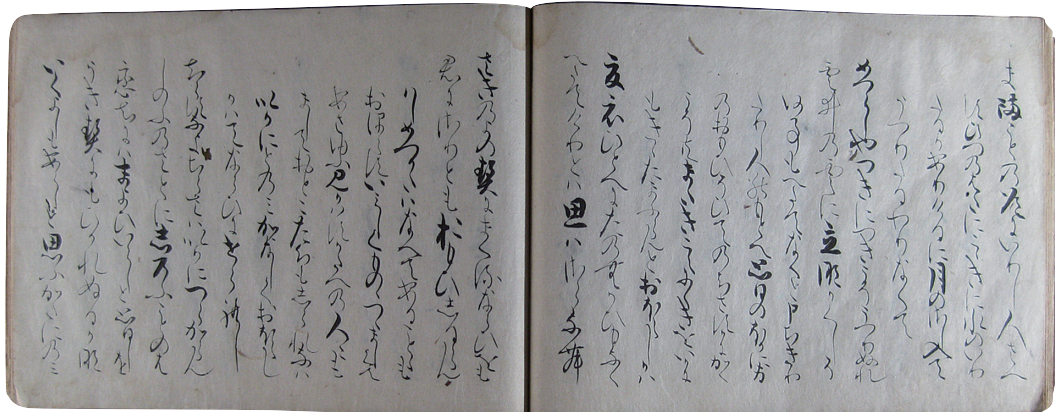
127 きくからにいとゝむかしのこひしくて
庭火のふえのねにそなきぬる

おほやけの御かしこまりにて、とを
く行人、そこゝによへはとまりなと
きゝしかは、そのゆかりある人のもとへ

128 ふしなれぬのちのしのはらいかならん

おもひやるたに露けきものを
しりたる人の、さまかへたるか、
こんといひてをともせぬに、

「 28 オ



ままことの道にいりし人さへ

すひつのはたに、こゝきに水のいり
たるかありけるに、月のさし入て
うつりたる、わりなくて、

130 めつらしやつきにつきこそうつりぬれ
雲の雲に立なかくしそ

何事もへたでなくと申ちきり

たりし人のもとへ、思ひのほかに身
のおもひそひてのち、さすかに、かく

こそともまたきこえにくきを、いかに
もきゝたまふらんとおほえしかは、

131 夏衣ひとへにたのむかひもなく
へたでけりとは思はさらなむ

132 さきのよの契にまくるならひをも

君にさりともおもひしるらん

はしめつかたは、なへてあることゝも
おほえず、いみしくものゝつゝましくて、

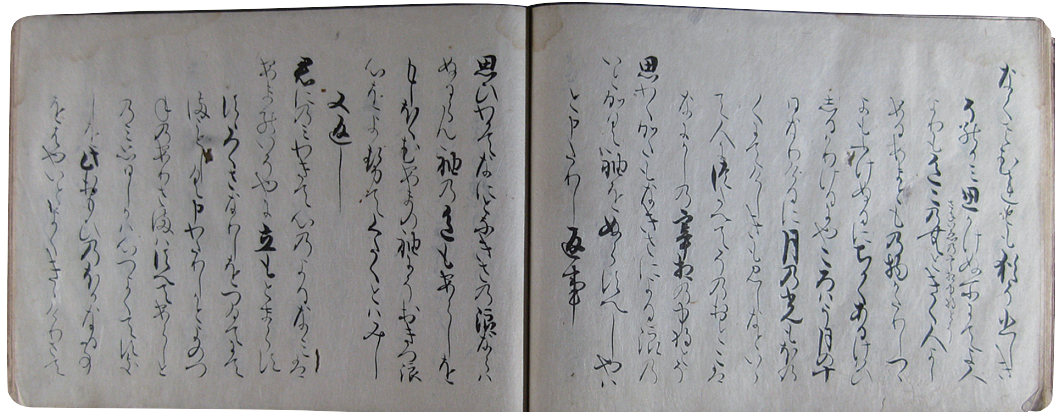
あさゆふ見かはすかたへの人々も、
ましておとこたちも、しられなは

いかにとのみかなしくおほえし
かは、てならひにせられし。

133 ちらすなよちらさはいかにつらからん
しのふのさとにしふことは

134 戀ちにはまよいらしと思ひしを
うき契にもひかれぬるかな

135 いくよしもあらしと思ふかたにのみ



なくさむれとも猶そ悲しき

そのかみ、思かけぬ所にて、よ人
よりも色さねいろの宰相中将とぞこのむときく人、よし

あるあまとの物かたりしつゝ、
よもふけぬるに、ちかくあるけはひ

しるかりけるにや、ころはう月の十
日なりけるに、月の光もほの

くにて、けしきも見しなといゝ
て、人につたへて、そのおとこは

136 思わくかたもなきさによる浪の
なにかしの宰相の中將とぞ。

いとかく袖をぬらすへしやは
と申たりし返事

137 思ひわかてなにとなきさの浪ならば
ぬるらん袖の色もあらしを

138 もしほくむあまの袖にそおきつ浪
心をよせてくたくとはみし

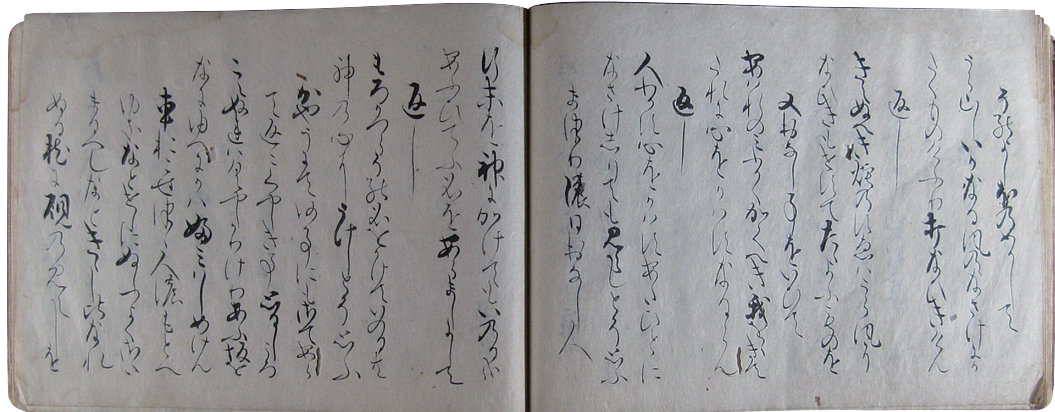
又、返し

139 君にのみわきて心よるなみは
あまのいそやに立もとまらず

すゝろくさなりしをつるてにて、
まことしく申わたりしかと、よのつ

ねのありさまは、すへてあらしと
のみ思ひしかは、心つよくてすき

しを、此おもひのほかなる事
を、はやいとよくきゝけり。さて、



そのよしほのめかして、

140 うら山しいかなる風のなさけにか
たくものけふり打なひきけん

返し

141 きえぬへき煙のすゑはうら風に
なひきもせすてたよふものを

又おなし事をいひて、

142 あはれのみふかくかくへき我をよきて
たれに心をかはすなるらん

返し

143 人わかす心をかはすあたひとに
なさけしりても見えしと思ふ

まつりの日、おなし人、

144 行末を神にかけてもいのる哉
あふひてふ名をあらましにして

返し

145 もろかつらその名をかけていのる共
神の心にうけしと思ふ

かやうにて、何事にもさてあら

て、返々くやしき事思ひしころ、

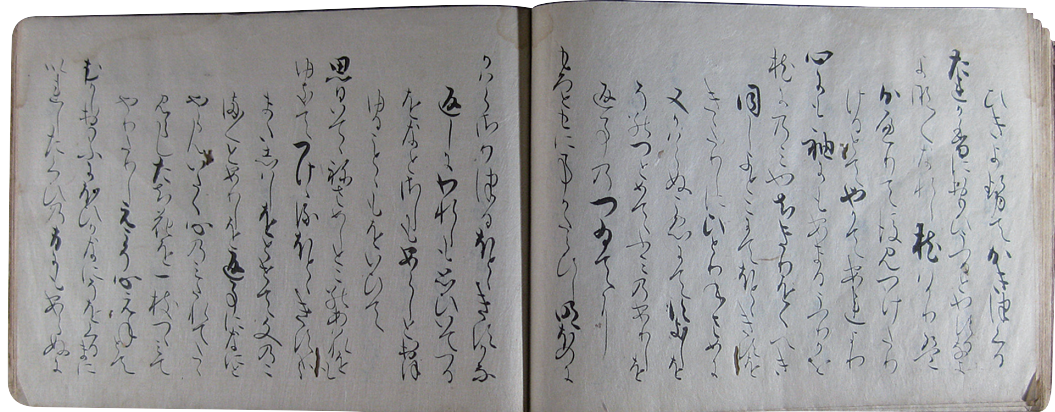
146 こえぬれはくやしかりけりあふ坂を
なにゆへにかはふみはしめけん

車おこせつゝ、人のもとへ
ゆきなとせしに、ぬしつよくきた

まるへしなときよし比、なれ
ぬる枕に、硯の見えしを

「 30ウ

「 31オ



ひきよせて、かきつくる。

147 たれか香におもひうつるとわたるなよ
よなくなれし枕はかりは

かへりて後、見つけたり

けるとて、やかてあれより、

148 心にも袖にもあまるうつりかを
枕にのみやちきりをくへき

同じ、よとこにてほとよきすを

きよたりしに、ひとりねさめに、

又かはらぬこゑにてすきしを、

そのつとめて、ふみのありしを
返事のつるてに、

149 もろともに事かたらひし明ほのに
かはらさりつるほとよきすかな

返しに、われしも思ひいてつる
をなと、さしもあらしとおほ

ゆることよをいひて、

150 思ひいてよねさめしこのあはれをも
ゆきてつけゝるほとよきす哉

またしはしをとせて、文のこ

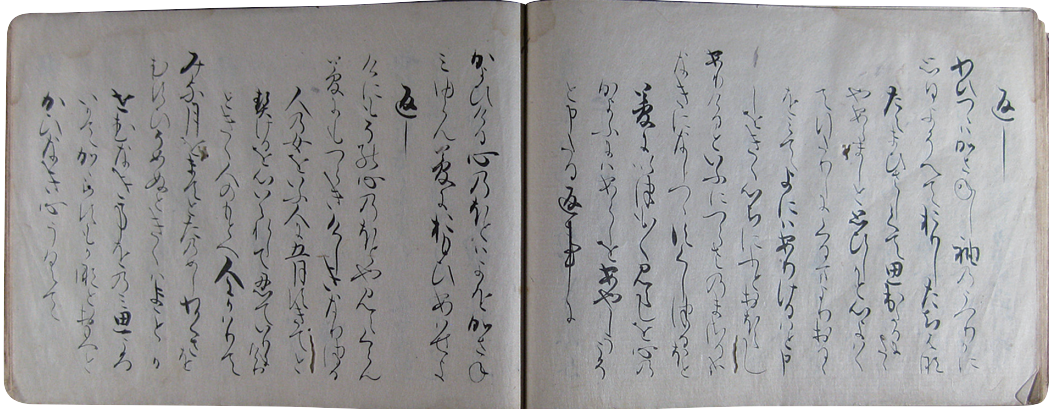
まくとありしを返事に、なにと
やらん、いたく心のみたれて、たよ

見えたち花を、一枝つゝみて
やりたりし。えこそ心えねとて、

151 むかしおもふにほひかなにそをくるまに
いれしたくひの身にもあらぬに

「 31ウ

「 32オ



返し

152 わひつゝはかさねし袖のうつりに

思ひよそへておりしたちはな

たえまひさしくて思出たるに、たゝ

やあらまじと、思ひしかと、心よはく

て行たりしに、くるまよりおるゝ

をみて、よにはありけるはと申

153 ありけるといふにつらさのまさる哉

なきになしつゝすくしつるほと

夢にいつも見えしを、心の

かよふにはあらしを、あやしうこそ

と申たる返事に、

「 32ウ

154 かよひける心のほとはよをかさね

みゆらん夢におもひあはせよ

返し

155 けにもその心のほとや見えくらん

夢にもつらきけしきなりつる

人の女をいふ人に、五月すきてと

契けるを心いられて、忍ていりにけり

156 みな月をまてとたのめしわかさを

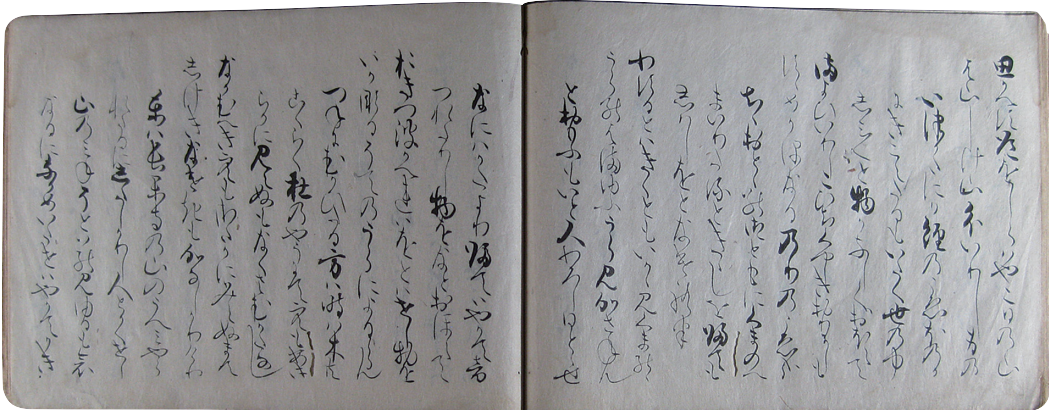
むすひそめぬときくはまことか

せむなき事をのみ思ころ、

いかてかゝらすもかなとおもへと

かひなき、心うくて、

「 33オ



157 思かへす道をしらはやこひの山

は山しけ山分いりし身の

いつかたにか経のこゑほのか

にきこえたるも、いたく世の中

しみく物かなしくおほえて

158 まよひりしこひちくやしきおりにしも

すゝめかほなるのりのこゑ哉

ちゝおとゝの御ともに、くまのへ

まいりたるときゝしを帰ても

しはしをとなければ、

159 わするとはきくともいかゝみくまのゝ

うらのはまゆふうらみかさねん

とおもふも、いと人わろし。ひとゝせ

「 33ウ

なにはかたより帰ては、やかて音

つれたりし物をなとおほえて、

160 おきつ波かへれはをとはせし物を

いかなるそてのうらによるらん

つねにむかひたる方は、時は木共

こくらく、杜のやうにて、空もあき

らかに見えぬも、なくさむかたなし。

161 なかむへき空もさたかにみえぬまで

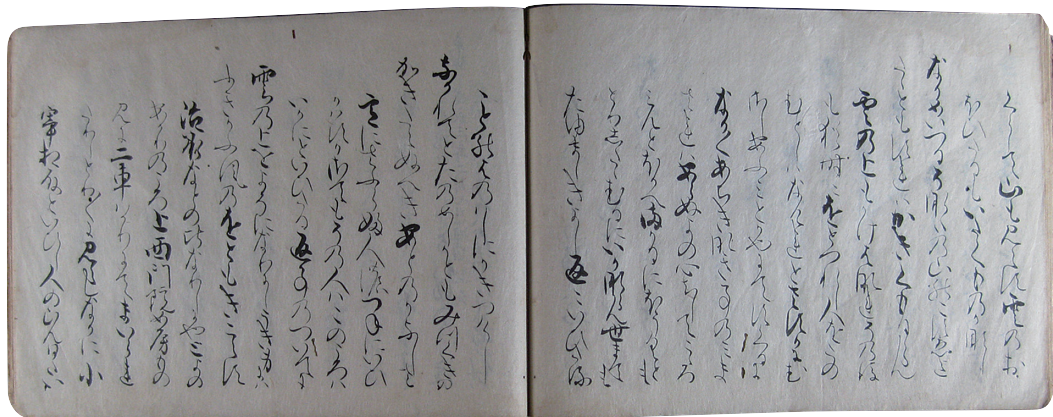
しけなききもかなしかりけり

東は長楽寺の山のうへみやら

れたるに、したしかりし人とかくせし

山のみね、そとはの見ゆるも哀なるに、なかめいたせは、やかてかき

「 34オ



くらして、山も見えず、雲のお
ほひたるも、いたくものかなし。

162 なかめいつるそなたの山のごすゑ迄

たゝともすれはかきくもるらん

雲の上もかけはなれ、その後

も猶時々をつれし人を、たの

むとしはなけれど、さすかにむ

さしあふみとかやにてするに、

なか／＼あちきなき事のみま

されは、あらぬよの心ちして、こゝろ

みんと、ほかへまかるに、ほうくとも

とりしたゝむるに、いかならん世までも

たゆましきよし、返々いひたる

ことのはのしにかきつけし。

163 なかれてとたのめしかともみつっきの

かきたえぬへきあとのかなしき

宮にさふらふ人の、つねにいひ

かはすか、さてもその人はこのころは

いかにといひたる返事のついでに、

164 雲の上をよそになりしうき身には

ふきかふ風のをともきこえす

治承などの比なりしにや、とよの

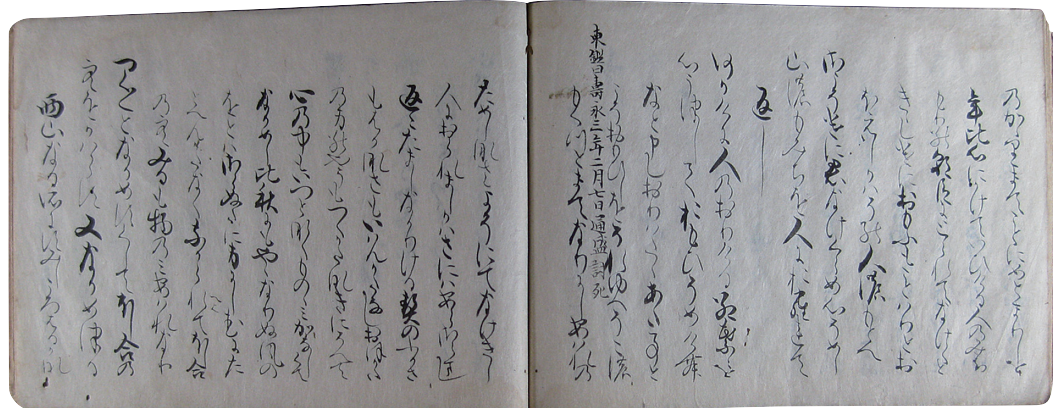
あかりのころ、上西門院女房、もの

見に二車はかりにてまいられ

たりし、とり／＼に見えしなかに、小

宰相殿といひし人のひんひたい

「 35 オ



のかゝりまで、ことにめとまりしを、
年比心にかけていひける人の、みち

もりの朝臣にとられて、なけくと

きゝし、けにおもふもことほりとお

ほえしかは、その人のもとへ、

165 さこそけに君なけくらめ心そめし

山のみちを人におられて

返し

166 何かけに人のおりける紅葉ゝを

心うつしておもひそめけむ

など申しおりは、たゝあた事と

こそおもひしをそれゆへそこの

東鑑日、壽永三年二月七日通盛討死

もくつとまでなりにし、あはれの

ためしなき、よそにてなけきし

人におられましかは、さにはあらざらまし、

返々たましなかりける契のふかさ

もはかなさも、いはんかたなし。おほかた

の身のやうも、つくかたなきにそへて、

心の中もいつとなくものゝみかなしくて

ななめし比、秋にもやゝなりぬ。風の

をとほさらぬたに身にむに、た

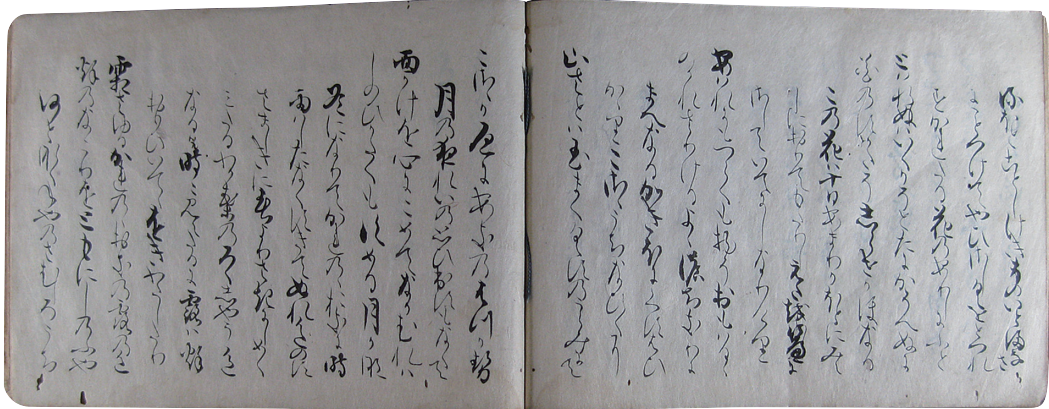
とへんかたなくなかれ、^歎ほし合

の空みるも、物のみあはれなり。

167 つく／＼となかめすくしてほし合の

空をかはらす又なかめつる

「 36 オ



るほと、ことしけき身のいとまなき
にことつけてや、ひさしくをとつれ
す、かれたる花のありしに、ふと、
168 とはれぬはいくかそとにかそへぬに
花のすかたそしらせかほなる
この花は、十日あまりかほとにみえ
しに、おりてもたりしえたを、簾に
さしていてにしなりけり。

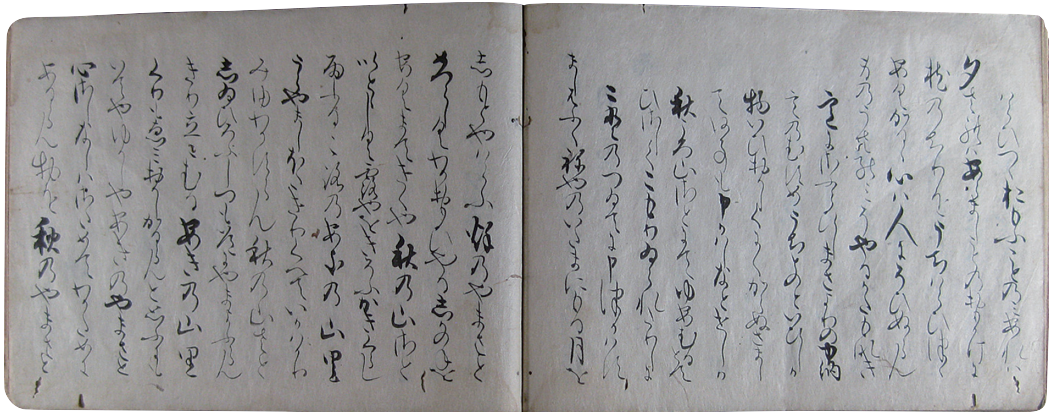
169 あはれにもつらくも物そおもはるゝ
のかれさりけるよゝのちきりに
まへなるかきほに、くすはひ
かゝり、こさゝうちなひくに、

170 山さとは玉まくくすのうらみにて
こさゝか原にあきのはつかせ
月の夜、れいの思ひ出すもなくて、
171 面かけを心にこめてなかむれは
しのひかたくもすめる月かな
冬になりて、かれのゝおきに、時
雨はしたなくすきて、ぬれ色のす
さましきに、春よりさきにしめく
みたるわか葉の、ろくしやう色
なるか、時々見えたるに、露は、秋
おもひいてゝ、をきわたしたり。

172 霜さゆるかれのゝおきの露の色
秋のなこりをともにしのふや
何となく、ねやのさむしろうち

「 37 オ

「 36 ウ



はらひつゝ、おもふことのみあれは、
173 夕されはあらましことのおもかけに
枕のちりをうちはらひつゝ、

174 あくかるゝ心は人にそひぬらん
身のうさのみそやるかたもなき
宮にさふらひしまさよりの中納
言のむすめ、うちとのといひしか、
物いひおかしくにくからぬさまし
て、何事も申かはしなとせしか、
秋ころ山さとにて、ゆあむるとて、
ひさしくこもりゐられたりしに、
ことのつるてに申つかはす。

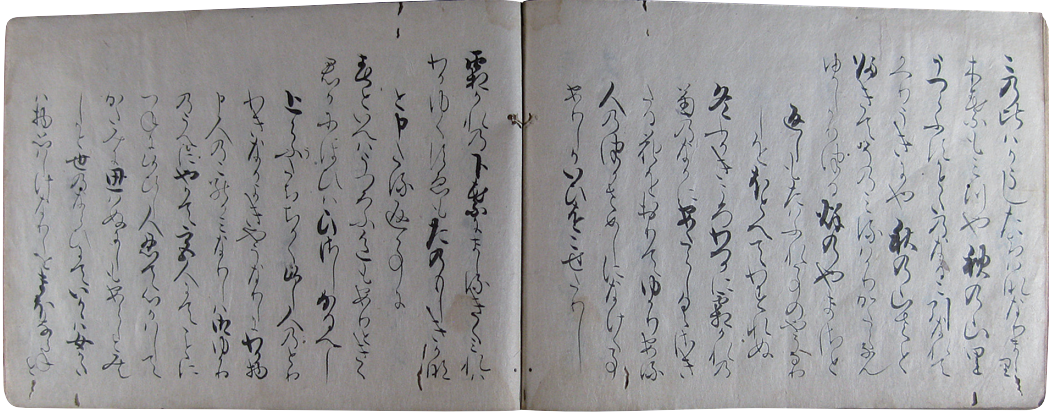
175 ましはふくねやのいたまにもる月を
しもとやはらふ秋のやまさと
176 めつらしくわかおもひやるしかのねを
あくまできくや秋の山さと
177 いとゝしく露やをきそふかきくらし
雨ふるころのあきの山里
178 うらやましほたきりくへていかはかり
みゆわかすらん秋の山さと
179 しるひろふしつも道にやまよふらん
きり立こむるあきの山里

180 くりもゑみおかしかるらんと思ふにも
いてやゆかしやあきのやまさと
181 心さしなはさためてわかために
あるらん物を秋のやまさと

「 37 オ

「 38 オ

「 37 ウ



182 この比はかうしたちはななりましり
木葉もみつや秋の山里

183 うつらふすかとたのなるこ引なれて
かへりうきにや秋の山さと

184 帰きてそのみるはかりかたらなん
ゆかしかりつる秋のやまさと

返しもたはふれ事のやうなり
しを、ほとへてわすれぬ。

冬ふかきころ、わつかに霜かれの
菊のなかに、あたらしくさき
たる花をおりて、ゆかりある
人のつかさめしになけく事
ありしか、いひをこせたりし

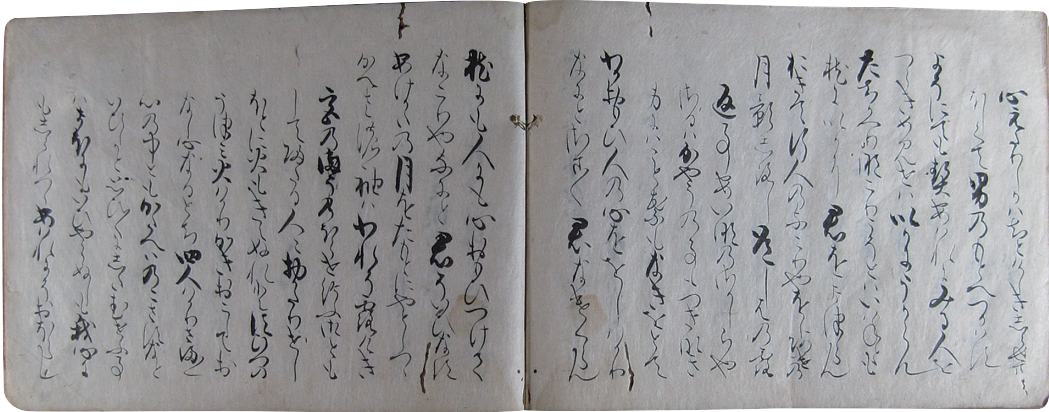
185 霜かれの下葉にまじるきくみれば
わかゆくすゑもたのもしきかな
と申たる返事に

186 春といへはうつろふ色もありときく
君かにほひはひさしかるへし
上らふたちちかく候し人の、とり

わきなかよきやうなりしに、わか物
申人のこのかみなりしは、御ゆかり
のうへに、やかて客人にて、ことに
つねに候ひし人、忍て心かはして、
かたみに思はぬよしもあらしとみえ
しかと、世のならひにて、いかゞは女かた
は物思はしけなりしを、まほならねと

「 39 オ

「 38 ウ



心えたりしかは、ちと、けしきしらせて
ほしくて、男のもとへつかはず。

187 よそにても契あはれにみる人を
つらきめ見せはいかにうからん

188 たちかへりなこりこそとはいはねとも
枕もいかに君をまつらん

189 おきて行人のなこりやをしあけの
月影しろし道しはの露

返事、あいなのさかしらや。
さるはかやうの事も、つきなき
身には、こと葉もなきをとて、
190 わかおもひ人の心ををしはかり
なにとさまく君なけくらん

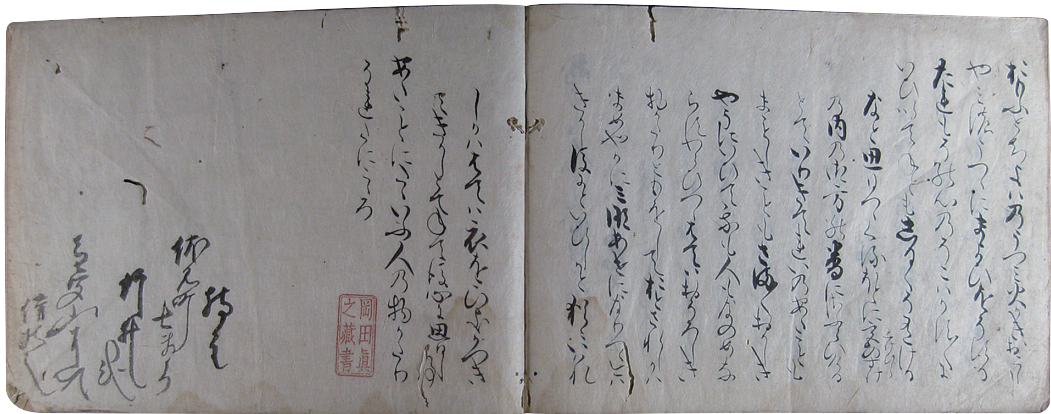
191 枕にも人にも心おもひつけて
なこりやなにと君そいひなす

192 あげかたの月をたもとにやとしつ、
かへさの袖はわれそ露けき
宮のまうのほらせ給ふ御とも

して帰たる人々、物かたりせし
ほとに火もきえぬれと、すひつの
うつみ火はかりかきおこして、お
なし心なるとち四人はかりさまく、
心の中とも、かたへはのこさすなと
いひしかと、思ひくにしたむせふ事
は、まほにもいひやらぬしも、我心に
もしられつゝ、あはれにそおほえし。

「 40 オ

「 39 ウ



193 おもふとちよはのうつみ火かきおこし
やみのうつゝにまよひをそする

194 たれもその心のそこはかすゝに

いひいてねともしるくそ有ける

なと思ひつゝくるほどに、宮のすけ

の、内の御方の番にさふらひける

とていりきて、れいのあたことも、

まことしきことも、さま／＼おかしき

やうにいひて、我も人もなのめな

らすわらひつゝ、はては、おそろしき

物かたりともをしておとされしかは、

まめやかにみな、あせになりつゝ、今は

きかし。後にといひしかと、猶々いはれ

しかは、はては衣をひきかつき

て、きかして、ねて後心に思ひし事、

195 あたことにたゝいふ人の物かたり

それたにこゝろ

「岡田眞之藏書」(朱印)



「41オ



「裏表紙

附記

資料調査に際してご配慮いただき、影印・翻刻を許可してくださった
昭和女子大学図書館に深謝申し上げます。

(さいとう

あきら

日本語日本文学科)